この児玉氏の提唱を考慮すれば、櫻井氏の本書も(干拓地における神社創建の事例以外は)伊勢神宮を有する三重県という独特の場を対象にした、そこでの宗教文化のローカリティを調査・分析した学的営為であると解釈すると、妥当性が高いのではないだろうか。こうした神社セントリックとも称することができるような独自のローカリティを有する地の宗教文化の研究、という視角をいわば縦軸として、社会変化と神社との関わり合いへの関心を横軸とする本書は、その交点において高い学術的価値を有していると評者は考える。

最後に、学術書の出版が厳しい昨今、美しい表紙カバーをはじめとする立派な装丁で、しかも内容の質量ともの豊かさ比べて格段に安価な刊行を実現した出版社も、称賛に値するだろうと付記して、拙い書評を閉じさせていただくことにする。

板井正斉著

『ささえあいの神道文化』

弘文堂 二〇一一年六月三〇日刊

A5判 iv+二三五+ii頁 四〇〇〇円+税

黒崎浩行

本書は、現代日本社会の喫緊の課題として「新たなご縁や支え合いの形」を掲げ、そこに「神道文化」の役割を見出すための研究視点の創出をめざして、関連諸分野における研究の博搜と、独自の実証的な調査とを重ねてきた著者の研究成果が一冊にまとめられたものである。第一部「神道文化と現代的な社会課題をめぐる研究視点」、第二部「障害者・高齢者の伊勢参宮とそれを支えるボランティアの相関性」、第三部「ささえあいの聖地へ」の三部構成となっている。

第一部(第一〜四章)では、「神道文化」と現代的な社会課題とのかかわりがこれまでどのように論じられてきたかをふりかえりつつ、その蓄積の不備な点を析出し、これからの展望を提示している。

第一章「神道文化に基づいた「地域・福祉・文化」研究の特質」では、第二次世界大戦後日本の社会福祉において、国際的な価値理念の変化や国内的な政治経済状況の影響のなかで、「地域福祉」の推進や「福祉文化」の創造が提唱されるように

なってきたことを挙げ、しかしながら具体的な研究の蓄積は乏しく、個別ケアの背景にある「かかわる者・かかわられる者相互の価値観」と、それを歴史的に培ってきた地域文化とを統合的に考察する「地域・福祉・文化」研究が必要であると指摘する。

第二章「地域・福祉・文化」研究の背景―福祉から社会貢献へ―では、平成十年以降の「地域・福祉・文化」研究につながる研究動向を、各種シンポジウム、学会での議論からふりかえっていく。起点とした平成十年には、皇學館大学神道研究所で「神道」を伝える―今、なぜ、何を?―神道と現代社会―と題したシンポジウムが開催されたが、ここでは神職でない立場から、神道と現代社会とのかわりを論じるさいの「実証性」・「客観性」の必要性が提起され、神職の立場からのもこれが共有された。また神道を現代社会に「伝える」だけでなく、社会から神道が「求められている」ことにも目を向けるといふ、現代社会と神道との互恵的な関係への着目が確認されたという。その後には、これまであまり論じられてこなかった「神道福祉」を、仏教福祉、キリスト教福祉と比較して「地域福祉」とのつながりにその特質を見出す視点が加わった。さらに、「宗教と福祉」の研究が、宗教の「社会貢献」・「社会参加」に関する稲場圭信氏、櫻井義秀氏らの研究と接近、融合していき、そのなかに現代神道をめぐる研究も参入していったさまを描き出している。

つづく第三章「福祉と社会貢献の概念整理」では、前章で指摘された「福祉」と「社会貢献」との接近、融合をふたたびと

りあげ、両者の「混同」に対する「違和感」を、白波瀬達也氏の論考を参照しつつ論じている。そこには、ポスト福祉国家時代に至って「小さな政府」へ向かう社会福祉制度に対する補完的役割を、民間の市民活動や地域の共助機能の再構築に期待し、そのなかで福祉が一般化していくことへの、著者の批判的なまなざしがある。「最大多数の最大幸福」からこぼれ落ちるニーズに対応するのが狭義の専門的な福祉であり、従来、宗教者・宗教団体は宗教的価値観を源泉としてこうした対抗的役割を主体的に担ってきた。しかし前述の文脈のなかで一般化された「福祉」を「社会貢献」に安易に結びつけたことが、「神道と福祉」、「神道と社会貢献」を論じるさいの足腰の弱さになっている、と指摘する。そして両者を単純に使い分けることを提唱し、「神社神道の社会貢献」を、神社本庁が昭和五十年から行ってきた神社振興対策による教化モデル神社の取り組みに見いだす分析視点を挙げると同時に、「社会貢献」とは区別される神社・神職の活動に「社会との緊張関係を持ちながら、神道の独自性を見いだす」(四九頁)視点をすすきあげている。

第四章「新たな支え合い」をめぐる伝統的価値観の可能性」では、現代の社会課題をめぐる研究動向や政府の施策をふまえて、神道文化に基づいた伝統的な価値観がそこにとどのように対応、対応していけるのか、について、三つの事例報告をまじえながらその可能性を論じている。「新たな支え合い」という語句は、厚生労働省が設置した「これからの地域福祉のあり方に関する研究会」が平成二十年にまとめた報告書『地域における「新たな支え合い」を求めて―住民と行政の協働による新し

い福祉―』からとられている。このなかで、「新たな支え合い(共助)に期待されているのは、多様なセクターがそれを担うことで地域の多様な福祉ニーズをとらえ、それに対応することである」とされ、そのための施策の展開が提唱されている。著者はこの「共助の多様性・多層性」に、地域が培ってきた伝統的な価値観をも連続的にとらえなおすことを提案する。

また、同時期に国土交通省が展開した「新たな公」によるコミュニティ創生モデル事業では、テーマのひとつに「文化伝統等地域資源を活用した持続可能な地域の形成」を含んでいることに注目する。さらに、医療・福祉といった社会保障を成り立たせる基盤に「コミュニティ」「自然」「スピリチュアリティ」をみる広井良典氏の視点や、ボランティア活動を通じた利他的精神の発達に日本人の精神的基層にある「和」「つながり」「思いやり」をみる稲場圭信氏の視点を援用し、伝統的価値観の適応可能性として、広井氏の着目する〈文化的空間性〉と、稲場氏の着目する〈意識性〉の二側面を挙げる。そして、三つの先駆的な事例それぞれについてこの両側面を挙げたうえで、「意識性」よりも〈文化的空間性〉の積極的開放・活用を優先させる(七〇頁)ことが有効だとする。

以上が第一部の概要である。この十数年、それまでの「宗教と福祉」という観点に加えて、「宗教の社会貢献」という研究テーマが提唱され、学会等だけでなく宗教界をも巻き込んだ実践的な議論や、『社会貢献する宗教』(稲場圭信・櫻井義秀編、世界思想社、二〇〇九年)、電子ジャーナル『宗教と社会貢献』(二〇一一年四月)の刊行といった研究成果の発信にも展開

しているのだが、そのような活発な研究動向のなかにあつて著者のスタンスはきわめて冷静さを保っていると言えよう。専門的、ときには対抗的な「福祉」とそれを支える宗教的価値観を把握する視点を失うまいとする意志をうかがわせる。それと同時に、「小さな政府」化し社会保障制度が脆弱化する時代にあつて、新たな共助の再構築や市民活動に「神道文化」ないし「地域の伝統的価値観」が適応する可能性についても、それが行政からの都合のよい期待にもとづく動員であるという批判的な視点をかいま見せながらも(この論点は第二部の第四章にも見いだされる)、目配りがなされており、先駆的な事例の報告や、また神社本庁の教化モデル神社の取り組みにもあらためて着目することで、「神道と現代社会との互恵的な関係」をさぐるための実際的な手がかりをも提供している。

第二部「障害者・高齢者の伊勢参宮とそれを支えるボランティアの相関性」(第一～四章)では、障害者・高齢者へのケア・介助という専門的な福祉活動に焦点を当て、伊勢神宮参拝におけるボランティア活動を多角的に分析している。

第一章「問題の所在と研究視点」は、電動車いすで生活する障害者が、伊勢神宮を「祈りの場」として訪れたにもかかわらず、単独での参拝を拒否されたことへの怒りをつづったエッセイの紹介から始まる。著者はそこに、「宗教文化と福祉文化との現代的な関係性の中における社会課題が、一瞬に凝縮されて表出している」(八五頁)さまをみる。そして問題の所在を当事者同士の対立としてではなく、社会課題としてとらえなおそうとする。ここで、聖地が「観光地化」していくという聖性の

変容とは別に、真摯な祈りを捧げようとする人びとの聖地へのアクセシビリティを高める活動における、本人とそれを支える人びとの意識という問題領域が提示される。観光人類学におけるホスト・ゲスト論やオーセンティシティ論が、山中弘氏らの「宗教とツーリズム」研究でもしばしば参照されるが、そこに障害者・高齢者と支える人びとの視点を加えることで、聖地へのアクセシビリティとボランティアリズムとの接点を見だし、課題を掘り下げていく。

第二章「伊勢参宮をめぐる「支え合い」の歴史」は、伊勢参宮の歴史と、現代的な参拝ボランティアとの連続性・非連続性をさぐることにあてられている。伊勢参宮の歴史的研究において、「抜け参り」・「お蔭げ参り」という社会的弱者の参詣行動と、「施行」と呼ばれる参宮人への施しの姿のなかに、「おかげさま」「支え合い」の精神を見いだすことができるものの、病気や障害の治癒を祈る人びとの寺社参詣や「接待」の文化に類比されるような実態は、伊勢参宮に関しては見いだしがたいとする。ただし、公的制度として駕籠・宿継といった移動手段が整備されながら、施行をあてにする障害者への規制もかけられるといった矛盾した実態などに、「支え合い」の多様性を見る。

第三章「伊勢参宮する障害者・高齢者の意識から」では、NPO法人伊勢志摩バリアフリーツアースセンター(BFTC)が対応した障害者・高齢者の三つの事例、車いすでの伊勢神宮参拝シミュレーション、おかげ横丁での電動車いす貸し出し利用者へのアンケート調査、地域住民から募集した伊勢神宮の参拝を介助するボランティアの利用者アンケート調査をもとに、伊

勢神宮を参拝する障害者・高齢者の意識を明らかにしている。それぞれの当事者は参拝したいという強い「宗教的ニーズ」をもっているが、サポートという「福祉的ニーズ」も同時に満たされなければ実現されない。支える側・支えられる側双方でのニーズが相互に結びついていくことが重要であるが、両者の価値観の相違が衝突を生み出しかねない。BFTCのような中間支援組織は、両者を理解し媒介することで、より柔軟な対応を可能にする効果をもつ、と分析する。

第四章「支える人々の意識から」では、支え合う者同士の意識にある「伊勢神宮らしさ」の共有が鍵であるとして、ボランティアの活動動機のかなかにある内発的な宗教性をさぐっている。観光ボランティアガイドへのインタビューによる意識調査と、バリアフリー・イマジネーション・ゲームによるバリアの「課題」と「対応方法」の分析からは、「伊勢神宮らしさ」を損なわずに参拝のニーズを満たそうとする柔軟な意識が見いだされる。次に、日本の社会福祉学において宗教的な内発性は周縁に押しやられ、むしろ社会保障制度の財政的限界を背景として都合のよい「表面的な内発性」の助長が進んできたこと、それが阪神・淡路大震災の経験によって、再び内発性を見いだす議論ができたことをみる。そして、宗教学における利他的行動研究ではボランティア活動動機に「和」「つながり」「思いやり」が見いだせるとする稲場圭信氏の研究があるが、こうした面を著者は「個人因子」として、宗教的内発性にはこれとは別に「環境因子」と呼ぶべき、地域文化的な内発性があるとし、その実証として「バリアフリーお木曳き」に参加したボランテ

イアの動機と満足度を尋ねたアンケート調査の分析を行っている。

第三部「ささえあいの聖地へ」は終章「NPOが豊かにする神道文化―伊勢神宮だから参加する人々―」からなる。前章の、ボランティア活動動機を支える地域文化的な内発性と、そこにみられる「伊勢神宮らしさ」の多様性という論点を引き継ぎながら、ここではさらにソーシャル・キャピタル研究の知見を導入する。すなわち、内閣府国民生活局の平成十五年の報告書を参照しつつ、市民活動と地縁的な活動とのポジティブ・フールドバックな関係に触れ、そこに地域の神社や神職が影響を与えうる可能性を検討している。具体的には、ソーシャル・キャピタルの指標となるデータ（ボランティア活動の年間行動者率、合計特殊出生率、完全失業率、刑法犯認知件数）と、神社に関連するデータ（人口千人あたりの神社数、神職数、氏子数、大麻頒布数）の都道府県別分布の相関係数を求めている。また、神社組織や氏子意識に関する調査もあわせて参照し、神社の空間に対する好意的な意識が市民活動への動機づけを促す可能性があると、ここに神社がソーシャル・キャピタル醸成に果たし得る役割があるという仮説を導き出している。そしてこの仮説を第二部でとりあげた伊勢神宮参拝ボランティアの調査にあらためて適用する。ボランティアは、地域における伊勢神宮の空間への好意的意識が「環境因子」として動機となり、多様な「伊勢神宮らしさ」を共有している。伊勢神宮を参拝する障害者・高齢者もまた、「宗教的ニーズ」と「福祉的ニーズ」を両義的に持ちつつ、多様な「伊勢神宮らしさ」を共有

する。中間支援組織はそのなかで橋渡し型のソーシャル・キャピタルの醸成を果たしている、とする。最後に、本研究を地域神社研究一般に広げるためには、「神社らしさ」のような間接的なつながりから論じる手法をもつことと、地域の人びとの関係性に神社が「そこにあること」で果たす役割を実証すること、という二つの課題があることを提示して結んでいる。

以上のように、第二部と第三部では、伊勢神宮参拝ボランティアという事象に即して、「新たな支え合い」における「神道文化」の関わり方の実際とこれからの可能性が明らかにされている。観光人類学、宗教とツーリズム研究、社会福祉学、宗教学の利他主義行動研究、ソーシャル・キャピタル論などの知見をとときには批判的に参照しつつ、障害者・高齢者の参宮を支えるボランティアの参加動機における「文化的空間性」の重要性を、アンケートの回答文のテキストマイニングやロールプレイなどの手法を駆使し、実証性、客観性を担保して提示している。この意義は大きい。そしてふりかえると、平成十年のシンポジウムで提起された、現代社会と神道との関係を論じるさいの「実証性」・「客観性」と、両者の互恵的な関係への着目という要請に、本書が一貫して応えていることを確認できる。

評者は、第一部第二章でまとめられている研究動向の流れで言うならば、「宗教の社会貢献」研究の立場から、現代社会と神社とのかかわりについて調査研究を開始したのだが、「神道と福祉」研究を出発点とし、あいまいな妥協をよしとしない著者の問題意識の高さに、あらためて触発された。著者が第一部第三章と第二部第四章で言及している、日本の社会保障制度の

抱える問題とボランティアとの関係については今日ホットな議論になっており(仁平典宏『ボランティアの誕生と終焉』名古屋大学出版会、二〇一一年、大野更紗「新しい公共」の分岐点——震災復興のなかの社会保障改革」『シノドスジャーナル』二〇一一年六月二一日)、福祉を支える宗教的内発性をあくまで探究しつつ、多様な動機とニーズを結ぶ「文化的空間性」に注目する著者の姿勢はこうした批判的議論において有効なのではないかと思う。

おわりに、今日、東日本大震災という未曾有の経験をもとに、支援と復興における共助に果たす神社の役割にあらためて注目が集まっているが、著者があとがきで触れているように、「神社の存在意義をあらためてとらえ直す」(中略)：役割：(中略)：の自覚が多くの方々の不幸の上に成り立っているという事実」(二二九頁)をとともに銘記させていただきたい。

津田雅夫編

『昭和思想』新論

——二十世紀日本思想史の試み——

文理閣 二〇〇九年七月二〇日刊

A5判 三三六頁 三二〇〇円＋税

藤田正勝

本書は津田雅夫「逆説」と「弁証法」——「昭和思想家」の成立をめぐる——、森下直貴「西田・三木・戸坂の思想と〈もの思考〉——「経験と制度」の歴史哲学への視座——」、別所良美「超国家主義と国民国家の自己超越——北一輝の「純正社会主義」の再評価にむけて——」、三谷竜彦「現代の「美しい国づくり」と柳宗悦の「美の国」構想」という四つの長編の論考からなる。取りあげられている思想家も、思想の内容も多様であるが、執筆者のあいだで課題意識は共有されているように見える。その共有された課題意識をわれわれは「昭和思想」新論」という表題のなかに見てとることができるところ。この表題のなかに入められた編者や執筆者たちの意図についてまず見ておきたい。

執筆者たちは今日の思想状況を「文脈を失い、方向を喪失」(三三二頁)した状況と捉えるところから出発する。そのような状況のなかで一定の方向を見いだしたいという意図が、本書を根本において支えている。その課題を、今日の思想状況の由